

巻頭言 秋学期が始まりました

比較文化学科長 君塚直隆

夏休みも終わり、各学年いずれも今年度の後半戦に突入しています。

1年生の方々にとっては、大学生活最初の夏休みでしたが、有意義に過ごされましたか？秋学期はいよいよ「合同ゼミナール」が始まります。ひと学年が5つのグループに分かれ、日本、アジア、欧米のそれぞれの先生方のセミナーに参加し、来年度春学期からそれぞれが所属していく専門ゼミナールの選定にも役立ててください。そのためにも、各先生方がどのような問題意識で、どのような学問を進めているのかも見極めてください。

2年生の方々は、「ゼミⅠ」が開始します。6～7月に決定したゼミで、2年後には提出される卒業論文作成のために、今のうちから学問の基礎を積み重ねていってください。

3年生の方々は、そろそろ「就職活動」を意識され始める頃かと思います。今年度から大手企業のいくつかは4月から採用試験を開始し、8月以降に内定を出すという日程へと変更していますが、実際にはこれまでどおり、3年次の12月頃から資料集めや実質的な就活は始まっていると考えてください。みなさんのなかには、この夏にインターンシップを体験された方もいるかもしれませんが、その折の経験もいかして頑張ってください。特に就職支援センターの方々は親身になって協力していただきますので、厚生棟2階を頻繁に訪れて自身の進む道を探してください。

4年生の方々は、いよいよ「卒業論文」の作成に向けて最後の段階に突入します。10月24日(土)には恒例の卒業論文中間報告会が開かれます。これまでの2年間にわたるゼミでの研鑽をふまえ、自分自身の研究を振り返るとともに、フロアで聴講する後輩たちのためにもよきお手本を示してください。また、なかにはまだ進路が確定していない方もいるかと思いますが、決してあきらめずに、ゼミの先生や友人たち、そして就職支援センターの方々にも助言を求めて、引き続き頑張ってください。

これからは暑さも収まり、思考や読書、さらには身体を動かしての様々な活動に最適の季節となります。学生生活はあっという間に終わってしまいます。各学年ともにそれぞれの目標に向かって、全力で取り組んでください。

合同ゼミナール

本学科教員 君塚 直隆

今年度の第2セメスター（1年次秋学期）から「合同ゼミナール」がスタートします。この講座は、ひと学年を学籍番号順に5つのグループに分け、分野ごとに分かれた5つの講座を3時限ずつ受講してもらうものです。その5つの分野とは、①日本（文学系）、②日本（歴史・文化系）、③アジア（歴史・文学・政治系）、④欧米（文学・歴史系）、⑤欧米（文化・宗教系）となります。それぞれの分野に専任教員の先生方が3名ずつ（今年度は2名の分野もあり）

おり、各人が専門的に研究・教授している学間について簡単に説明し、受講生との討論や学生同士のディスカッションなどで講義を進めていきます。

この講座の目的は、第3セメスター（2年次春学期）から始まる「ゼミナールⅠ」で、自分が学びたい分野は何なのかを学生個々人が見極めていくことにあります。秋学期最初に提示される自分のグループをしっかりと把握し、5つの教室を間違えずに回ってください。

教員の研究旅行

中国揚州訪問記

本学科教員 菅野 恵美

2015年8月21日～24日、中国江南の地である江蘇省の揚州と南京を訪問する機会を得た。江蘇省の省都で三国呉の都が置かれた南京とは異なり、揚州は聞き慣れない都市名だろう。だが揚州は古代から水運の要衝であり、例えば唐代では、遣唐使とともに中国に上陸した僧侶の円仁が滞在許可証を求め、揚州に滞在している。また、鑑真は日本へ行く前に揚州の大明寺を管理していた。揚州は実に日本と関係の深い町でもある。今回は、揚州で2012年に発見された隋の煬帝の墓が特別に見学できるということで、この町を始めて訪れた。

○運河の要衝、揚州

中国では、淮河【わいが】でもって交通手段が大きく分かれる。淮河以南は水運が盛んで、以北は陸路が主要な交通手段となる。揚州は淮河と長江の間を結ぶ運河の畔に位置し、古来、水上交通の必経の地であった。運河としての歴史は古くは春秋戦国時代に遡り、呉王夫差がここに城を築き、中原に乗り出すために河川を整備し運河を通した。時代は下り、6世紀には隋が南朝陳を滅ぼし、南北統一の

大運河を通したのだが、これも揚州を通っている。隋の煬帝は揚州が気に入入り、隋末の群雄割拠の大反乱が起こる最中も政治から目をそむけ、揚州の宮殿で享樂的な生活を送った。最後は家臣に殺され、遺体は揚州の

宮殿に安置されて何度か改葬された。今回発見の墓は、唐の政権が安定した太宗の時、正式に改葬されもので、煬帝の最後の墓である。

煬帝の墓は、旧市街地西北の丘陵地で別荘地の開発中に発見された。その後緊急に調査が為され、現在は墓の上の建屋によって保護されている。今後はこの一帯に出来た高級住宅は取り壊され、遺跡公園として運用していくという。



煬帝墓の墓室。博物館が作られる予定である。



市内を流れる運河。

中国の運河は世界遺産となったため、今後揚州は他の歴史的遺跡も含め、運河の歴史的都市として開発していくようだ。揚州は緑が深く、豊かな自然環境と、利便性の高い都市基盤とのバランスがととてもよく取れた町である。旧運河の水質は異臭も無く保たれている。この日は旧運河で、端午の節句に行われる龍船競技の練習が行われていた。地元ガイドの説明では、揚州の出身の江沢民元主席は、帰省の際に必ず市内の運河で龍船に乗り、故郷に錦を飾ったと言う。

鉄道が通らないのが揚州の難点である。開発業者によれば、今後は揚州に高速鉄道を通す計画があるそうだ。現在も文化的で風光明媚な佇まいが魅力的な揚州であるが、今後は更に鉄道によって観光業・物流が促進され、唐代の活況を取り戻すに違いない。

○揚州名物「麻油散【マーヨウサン】」と歴史

最後に揚州名物料理の一つ「麻油散【マーヨウサン】」を紹介したい。これは油で揚げた麺と、漬物などの惣菜をク

レープに包んで食べる料理である。要するに、小麦粉を異なる方法で調理した、主食にもなる一品なのだが、しっとりとしたクレープを噛むと、中の麺がサクサクと音を立て、漬物の香りと程よい塩分が食を進ませる。ついつい何枚も食べてしまった。小麦という食材を、調理法を変えて一つに合わせるアイディアに驚いた。この料理がいつの時代から登場したかは今のところ知る由も無い。だが、食材と調理法の歴史に思いを馳せてみると、小麦は3・4世紀以降に中国に急速に北から南へと受容された穀物である。宋・元の12・13世紀には、水運・陸運の発達により、南北の衣食住の混交が進んだ。菜種油の栽培と石炭の利用が広まるのもこの時期であり、元代の料理書には春巻きの原型とされる料理が紹介されている。このように考えると、小麦のクレープ・大量の油・高温調理法を用いる「麻油散」のいくつかの祖先は、宋・元期の南北交流が促進された時代に遡るのかもしれない。まさに水運の要衝の古都に相応しい料理だと感じた。



唐宋城門遺跡内に作られた観光地「東関街」。文化度は低い。店舗にもう工夫が必要だ。



揚州名物「麻油散」。手前には巻かれたクレープと惣菜、奥には糸束のような麺の揚げ物が添えられる。

卒論中間発表に向けて

本学科教員 岡田 桂

本年度の卒論中間報告会は10月24日(土)に行われます。卒業論文は、大学での学びの集大成です。これまで受けてきた講義の内容や、ゼミナールを通じて培ってきた興味をすべて注ぎ込む！という意気込みで執筆をすすめましょう。4年生にとって中間発表は、自分のテーマについてゼミ以外の学生から意見をもらえる貴重な機会です。毎年、「中間発表で得られたアドバイスのおかげで、卒論の内容がより良いものになった」と語る学生が多数います。また、中間発表会には、卒論執筆予定の3年生も必ず参加しなければなりません。ぜひとも、今後一年で自分が書き進めてゆくことになる「卒業論文」というもののイメージを、先輩が行う中間発表の内容や雰囲気からつかみ取って下さい。卒論作成は、長く辛い部分もありますが、それを乗り越えたみなさんは、必ず「自分の学びを形に残した」という代え

がたい充実感を得られることでしょう。



卒論中間発表風景

ワールドスタディ

オーストリア・ウィーンを終えて

3年 菅野 侑季

今年度のワールドスタディは、8月24日から9月3日までの11日間でオーストリアのウィーンを訪れた（担当教員：佐藤茂樹）。夏休みの集中講義では、オーストリアの文化や歴史を学び、オーストリアがドイツ語圏であることから、ドイツ語の練習も行った。そして、この期間中には各自の研究テーマの決定と現地での行動計画を立てた。私はこの行動計画を立てる際に、事前予約の必要な見学場所があることを知り、自分で連絡を取るということに挑戦した。結果としては、私たちの訪れる8月は開館しないという返事であったため、その場所を見学することはできなかった。しかし、母国語の違う人と相手の母国語で連絡を取るという非常に貴重な経験を行うことができた。

現地では、主に午前中にシェーンブルン宮殿やベルヴェデーレ宮殿などの歴史的に有名な場所を訪れ、その場所や建物の歴史的価値を自分の目で確かめた。午後は、集中講義期間中に立てた各自の行動計画に基づいての行動だった。私は「ウィーンの街と音楽」という自分の研究テーマに基づき、ウィーンで有名な作曲家であるモーツァルトやベートーヴェンの住居を利用した記念館を訪れた。また、現地

研修のちょうど中間日であった8月29日には、エクスカーシオンとしてザルツブルクを訪れた。ザルツブルクでは終日自由行動で、私は「サウンド・オブ・ミュージック」の主人公であるマリアが居たノンベルク修道院を訪れた。ザルツブルクは「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台として有名であり、今回は訪れることができなかったが、映画「サウンド・オブ・ミュージック」で使用されたミラベル宮殿もある。さらにクリスマスに歌われる「きよしこの夜」が誕生したとされる礼拝堂など、一度は目や耳にしたことのある場所が多く存在している。

私は、このワールドスタディを通して異文化に実際に触れてみることの大切さを実感した。日本国内で異文化体験はすることができるが、日本国内では日本人向けの異文化体験となるため、本物に近い体験となってしまうことが多い。しかし、実際に現地に赴くことで現地の本物の文化や習慣を体験することができる。この体験は、自分の価値観やモノの見方を変えるきっかけとなった。そして、この体験と変化を今後の自分の活動に役立てていきたいと考えている。



ベルヴェデーレ



ウィーン市庁舎



修道院クロスターノイブルク



ザルツブルク

就職活動

就職支援センター 就活「後ろ倒し」時代に“強い”学生とは

2016年卒生から、就活時期が「後ろ倒し」となり、OB・OG訪問やリクレーターなど、人のネットワークを介した“オフライン型”就活が復活しました。この「後ろ倒し」は、企業が学生へ就活の早期終了を求める『オウハラ』問題や、例年以上の複数内定所持者など『内定バブル』という新たな社会問題を生みました。

就職指導の現場では、この変化の波に乗れた学生と、乗り遅れた学生の『2極化』が表れています。前者は、インターンシップ時期から志望企業を定めて早期にアンテナを

張り、情報を集めていた行動力のある学生。後者は広報解禁時期の3月から就活を始めたマイペースな学生のように感じました。

今後も早期に自分の将来像を定め、就活を真剣に始める学生が結果を出す状況は続きそうです。学生は、「学業での取り組み」や「課外活動の経験」に加え「急激な社会変化への適応力」も必須といえますので、在学中に多くの社会経験を積み、成功や失敗を通して強く成長して欲しいと思います。

学生の就活

4年 深作 侑里

私は、アパレル業界一本で就職活動をしました。選考を受けた企業は20社ほどです。選考の面接やGDも初めは上手くいきませんでした。やはり大事なのは慣れです。回数を重ねるしかありません。その経験が後に力となって必ず良い結果に繋がっていきます。約4ヶ月間の就活をし、内定を頂いた企業は3社です。その中でも、就職先を選んだ決め手は社員さんが楽しんで働いているかどうかということです。今はまだ不安なことだらけですが、4月から社員として楽しく働く自分の姿を今から楽しみにしています。後輩の皆さんも自分を信じて頑張ってください。

4年 齋藤 凜都

私は就職活動で自分を知るということを学びました。私は就職活動を始めた当初、一つの業界にのみ興味があり私自身の視野を狭めていました。視野を狭めるということは、自分自身の世界や可能性を狭めるということです。ですので、これから就職活動に取り組む皆さんは様々な世界に目を向けてみてください。業界や職種により様々な角度で面接官に見ていただけます。多種多様な業界職種の選考を通して、様々な角度で自分自身をアピールしてみてください。それが自分を知ることにつながり、必ず満足のいく就職活動になると思います。

最後に、選考をして頂いているという謙虚な気持ちと働かせていただきたいという情熱を持って就職活動に取り組んでください。就職活動を始める皆さんに良い出会いがあ

ることを祈っております。頑張ってください。

4年 中澤 円

私は何の仕事をしようか分らないまま就活を始めたので業界を絞らず説明会に参加しました。企業の説明を聞いて企業理念に共感できることや、興味を持てたところを中心に選考に進みました。就活は分からないことがたくさんあったので、大学の支援センターの先生に相談に行き、少しずつ進めました。大切だと感じたことは、「一人で溜めこめないこと」、分からないことは周りに相談し、自分に合った進め方で就活をしていってください。

4年 神代 紗希

私たちの学年から就職活動も変わり、スタートラインが「3月から」としっかり定まっていた分、速く早くと駆け出した人から順に決まっていくペースが多く、4月・5月と乗り出たブースには人が来なかったと企業側は嘆いていました。このことを踏まえ、来年からは企業側も早い時期にブースを設けるようなので、そのスピードに遅れず、かつ飲まれずを心掛けることが良いでしょう。

私も自分が何をしたいか分からず焦っていましたが、企業側も今年から就職活動が変わったということで不思議と距離は近く感じました。あまり、怖がる必要はありません。準備も大事ですが、とりあえず説明会だけでも…の気持ち

インターンシップに参加して

3年 三澤 美紗子

私は、この夏休み期間の9月7日から9月11日までの5日間、「東横イン横浜桜木町」というホテルでインターンシップを経験しました。はじめは旅行会社を希望していましたが、学校のインターンシップのリストには私の希望業界はなかったため、ホテル業界を選びました。書類選考から始まり面接、研修と緊張続きでした。ですが得るものも多くあり、会社とはどのようなものかを知ることができ、社会人としての仕事への熱意なども強く感じることで

しました。そして、大学生の私に足りないものが何かを考えさせられる研修でした。さらにいかに私が未熟であるかを知ることができました。大学生にとって、インターンシップというものはとても重要な就職活動への準備であると思いました。そして、たとえ自分の希望している職種、職業が見つからなかったとしても、他の業界をピックアップし自分の可能性を広げられるインターンシップに参加することを強くおすすめします。

学生の留学生活・海外語学研修

4年 南部 百香

大学二年次の後期から大学三年次の前期にかけ、10か月間、交換学生として韓国の高麗大学で現地の学生と共に学び、生活しました。留学前、私は語学能力の向上・海外ボランティアの参加等の目標を掲げ留学に臨みました。初めての海外生活・言葉も通じないルーミーとの共同生活など、不慣れに感じる事が多くありましたが、現地の韓国人バディや同時期に留学した日本人の友人達、講義で声を掛けてくれた韓国人や留学生たちに助けられ、楽しい留学生活を送る事ができました。何よりも、準備していった韓国語がなかなか使えず話すという行為に恐怖心を感じていましたが、友人たちの温かみに触れ交流を深めるうちに、自ら進んでコミュニケーションを取るようになり、自分自身の成長を感じる事ができました。現地の友人の輪が広がったことから韓国語の能力の向上は勿論のこと、現地の中学生と交流するボランティアに参加することができ、目標も達

成することができました。今後さらなる成長を遂げるために、この経験を活かし、努力していきます。



高麗大学と延世大学との対抗戦（高延戦）

オープンキャンパス・学科特別企画

本学科教員 大内 憲昭

2016年度の受験生を対象とした夏休みのオープンキャンパスが、8月1日と23日の2回、実施されました。学生の皆さんも、暑い最中に、金沢文庫キャンパスに足を運んだことを覚えていることでしょうか。今回は、1日が金沢文庫キャンパス、23日は金沢八景キャンパスで開催されるという変則的な実施でした。その中で、学科ごとに「学科特別企画」が行われましたが、比較文化学科は1日に「ワールドスタディ韓国・ソウル」（担当教員：大内憲昭）、23日に「ハイサイ（ハイタイ）（こんにちは）ー日本文化探訪（沖縄島と宮古の島々）ー」（担当教員：大越公平）をとり

あげました。学科特別企画には、高校生がそれぞれ30名程が参加してくれました。

1日の国際文化学部で学部の紹介には150名程の参加者があり、また23日には参加者が200名を越えました。参加した高校生は、先輩の案内でキャンパスツアーに参加したり、模擬授業、入試説明、学部紹介に耳を傾けていました。

既に8月のAO入試は終わりましたが、9月、11月、12月、2月、3月と、AO入試、指定校推薦入試、一般入試と、大学は入学試験の時期に「突入」します。



学科特別企画「日本文化探訪（沖縄島と宮古の島々）」



学科特別企画「ワールドスタディ～韓国・ソウル」パネル

比較文化学科通信 Vol.22

2015年11月1日発行

編集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科

編集協力：関東学院大学国際文化学部比較文化学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1 TEL:045(786)7179 URL:<http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル TEL:045(641)8080